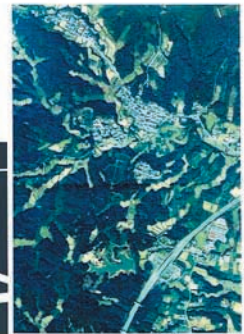


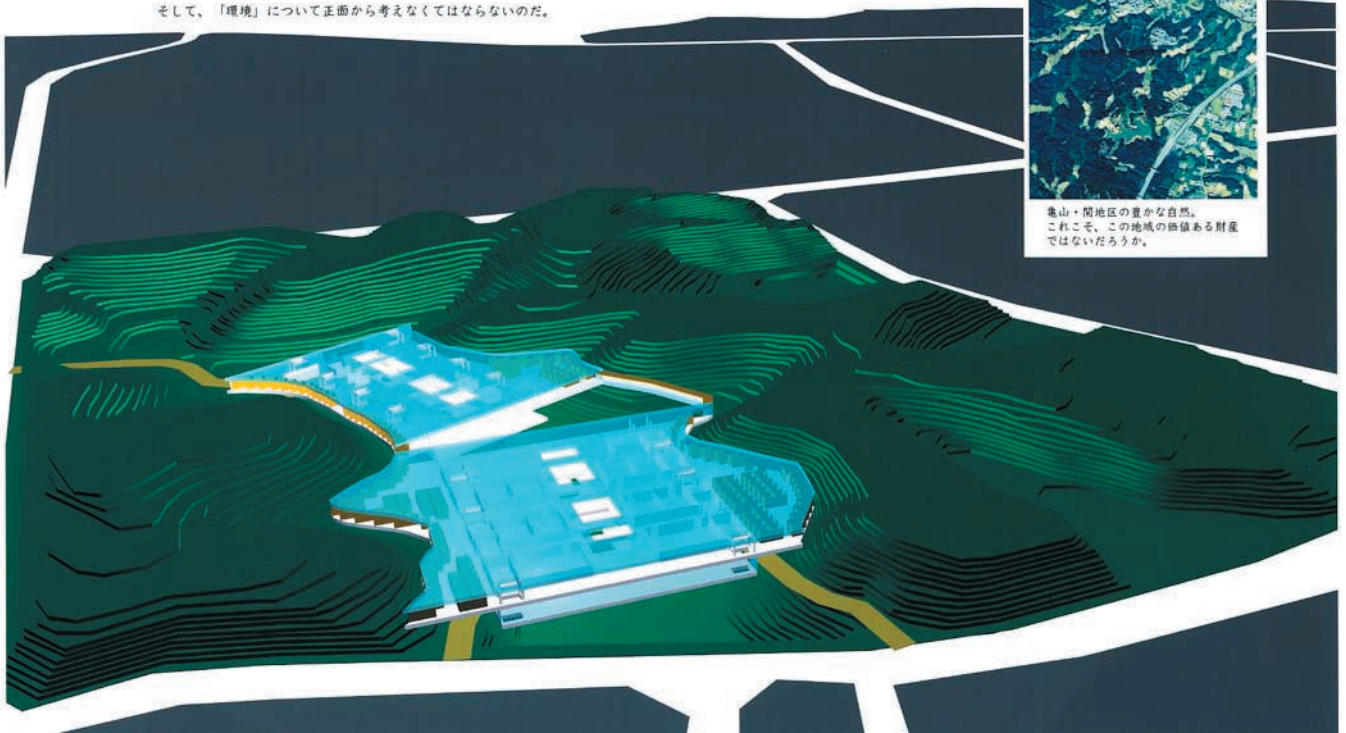
山をくずし、谷をうめ、それで僕らは満たされるのか・・・

金ではかえられない大切なものがそこにはある。
 「環境」、それは自然と生命とが作り出す場の力。
 環境問題は二酸化炭素や酸性雨に限ったことではない。
 その場所が長い間かけて育んできた力を失うことであるのだ。
 僕は今、またひとつ「環境」を失おうとしている。
 気づかないふりも、もう終わりにしなくてはならない。
 そして、「環境」について正面から考えなくてはならないのだ。

400710 小野田 祐一



亀山・間地区の豊かな自然。
 これこそ、この地域の価値ある財産
 ではないだろうか。

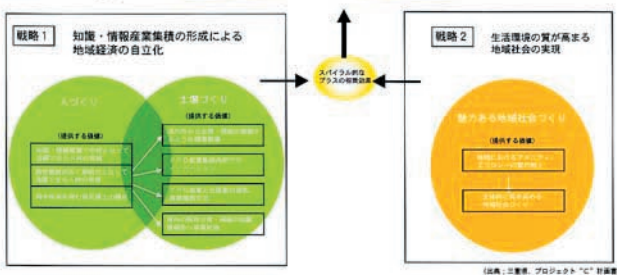


1. プロジェクト“C” 地方分権時代、三重県のスナリオ

昨年2月、三重県亀山・間地区に世界的流通企業を誘致することが決定した。これを機に、グローバル化、ボーダレス化に向けた地方分権時代によさわしい地域の創造を目的としたプロジェクトが立ち上がった。それがプロジェクト“C”である。

ビジョン

三重県を「世界の流通生産拠点」とするとともに、技術革新などのイノベーションが次々と生まれてくるような産業構造に変革していく
 内発的・持続的に地域が振興し、一人ひとりの自己実現を図ることができるような魅力あふれる自立した地域を創造する



2. 経済効率追求の愚痴理

大きな期待のからプロジェクト“C”。しかし、その現場の様子を見て疑問に思う。果たしてこれは、魅力あふれる地域への第一歩となるのだろうか。地域の魅力とは一体何であるのか。



企業による完成予想図
 テクノポリスはびじょくにつけてくるが、地味な景観を醸成する可能性がある。また、景観を醸成する可能性がある。景観を醸成する可能性がある。

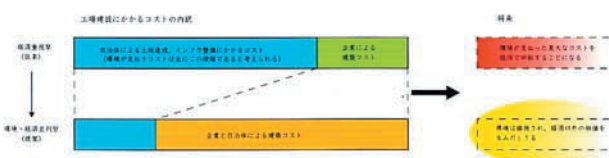
テクノポリス形成においては企業や研究団体の誘致が成功へのカギとなる。そのため、地方公共団体は企業の要求にスムーズに対応できることを重視する。企業の要求とはインフラの整備や建設コストに関することなど、つまり自社の経済効率を志願しているものになっているのではなからうか。その結果、現場では仰々しい工場を建てやすくするために用地をつくらなければならない。誘致競争が激化するにつれてこの状況はますますその度を増すであろう。経済効率中心の発想から抜け出さない限り、また同じことを繰り返すのではない。



3. 環境コスト

テクノポリスの形成において経済のコスト同様、環境が支払うコストも莫大なものとなる。経済と環境を両輪とらえるとき、二つのコストの関係から、建設のあり方を考える。

テクノポリスの形成において環境にもっとも負荷を帯びているのは、工場建設ではなく、企業誘致のために行われる過剰な土地造成やインフラ整備である。従来の方法は、経済的コストを同じく経済によって回収しようという観点に立ったものである。自治体による多額な先行投資と大規模な土地造成はリスクがあまりにも大きすぎる。企業側がもし、経済と環境を両輪とらえる立場にあるならば、その土地の「環境」というものをしっかりと見つけ、土地造成の初期段階から計画に携わっていくべきではないだろうか。自治体と企業が連携し、土地造成、インフラ整備を最小限に抑ええることで工場、研究所の建設にその費用を費やすことができる。さらに、環境コストは保存されることになり、将来、企業にとっても地域社会にとっても経済的価値をええ価値を生みだしうるのである。



4. 建築のあすべきこと

それは経済と環境が両輪に並ぶことも、その技術力をもって証明していくことではないだろうか。今こそまさに建築のチャレンジが必要とされている。



経済効率ではない環境への先行投資。環境の魅力を高める見直しが必要。また、景観を醸成する可能性がある。また、景観を醸成する可能性がある。

計画において大切にしたいこと
 1. 環境コストの削減
 2. 企業・研究機関の誘致。施設整備を促進するプログラム
 3. 自動車によるアクセス

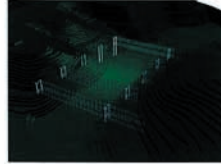
施設名	面積
300人規模の研究施設、部品製作工場	
敷地面積	115,700㎡
延べ面積	16,792㎡
研究施設	13,292㎡
工場	4,500㎡
駐車場	3,000㎡

敷地面積は建築基準法に基づき算出。延べ面積は建築基準法に基づき算出。敷地面積は建築基準法に基づき算出。延べ面積は建築基準法に基づき算出。

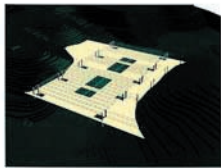
process



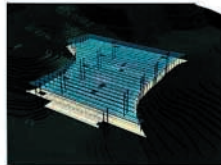
1. 起伏に富んだおもしろい地形がある



2. 柱を 15 m ピッチで配置する

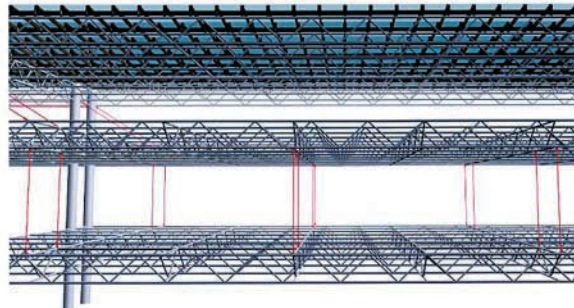


3. 橋同士を横につないで研究階級の床にする



4. 工場、駐車場を下に吊し、
上にはソーラーパネルをかけて完成

structural perspective

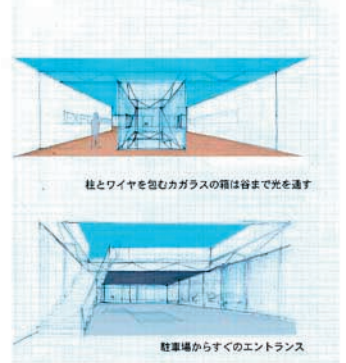


40 m の無柱空間を作り出し、かつ谷の機能を保持するためのつり構造。

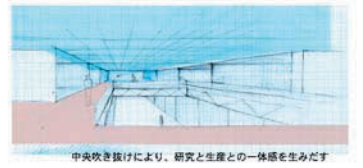


長手方向に 1 m ピッチ間隔で配置された木材はソーラーパネルを支えると同時に小梁の役割を果たす。

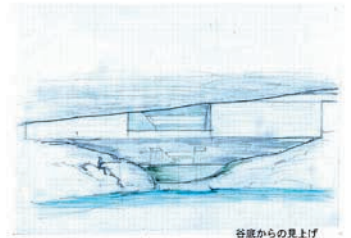
interior perspective



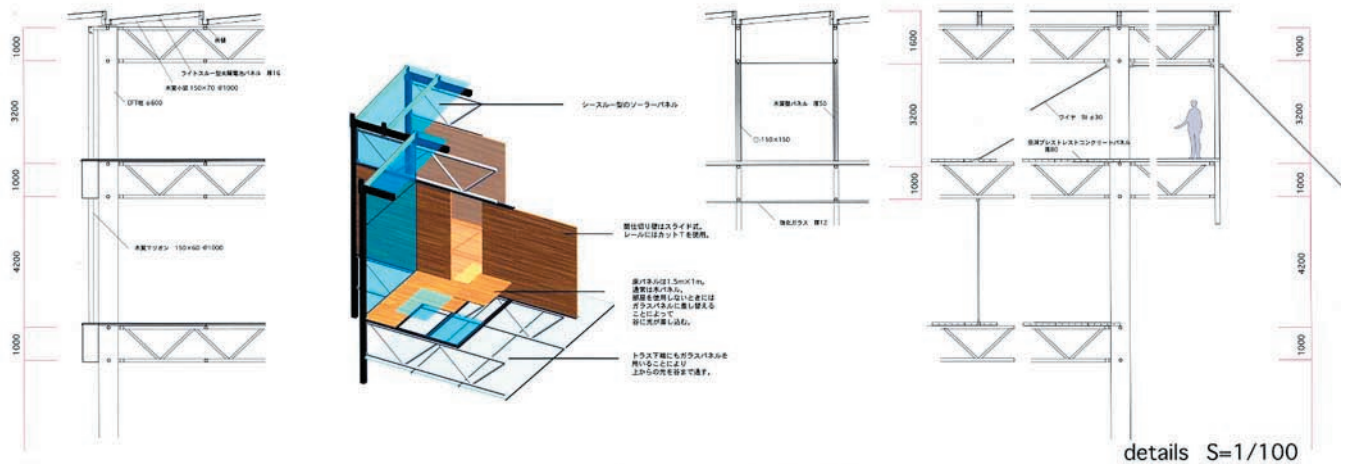
柱とワイヤを包むカガスの箱は谷まで光を通す



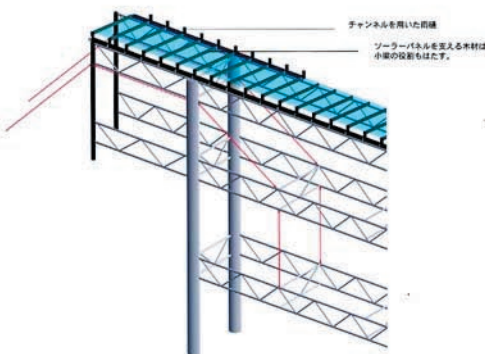
中央吹き抜けにより、研究と生産との一体感を生み出す



谷底からの見上げ



STRUCTURE & DETAIL



力の流れ

